
B L E A C H change of the worlds

夜代衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B L E A C H c h a n g e o f t h e w o r l d s

【Nコード】

N 6 5 3 3 V

【作者名】

夜代衣

【あらすじ】

世界に破滅の危機が訪れた時、世界を救いへと導いてくれる者、『還元師』。全てを元通りにしてくれる、夢のような力を持つものを人々はそう呼んだ。

ただし、忘れてはならない。

大きな力にはそのぶん代償が必要だということを

B L E A C Hを映画っぽく書いてみようという試みから始めました。できるだけ頑張りますので、よろしく願います。

プロローグ くものがたりく

男は嘆く

― 嗚呼、帰る場所がない

女は嘆く

― 嗚呼、愛しき人が死んだ

子は嘆く

― 嗚呼、全てがなくなった

夢々眠る事もできずに、現から逃れられずに

嘆きしか響かぬ世界の中心で一つの光が差し込んだ

それは全てが戻ってくる光

男は笑う

― 嗚呼、帰る場所は此处にあった

女は笑う

― 嗚呼、愛しき人が還ってきた

子は笑う

― 嗚呼、全てが戻ってきた

現が夢となった世界が
夢が現となる世界に

変わる

代わる

換わる

でも、よく覚えておくんだよ？

此処が『かわった』かわりに別の世界が『おわった』んだ
その代償は子々孫々、続いていく

何時か君たちの子孫が
再び危機に陥るだろう

その時、新たな『還元師』が生まれる

僕はもう此処には居られないから

次に世界が終わる時は

全てその『還元師』に任せるとしよう
生かすも殺すも『還元師』次第さ・・・

嗚呼、言ってなかったね

『還元師』がいくら世界を救う力を持っていても
『神様』じゃあない

え？似てるのにつて？おかしな人だね

じゃあ、僕が消える前に

この言葉を残そうか

『還元師』が世界を殺す時
『還元師』は一緒に滅びて
もう二度と現れる事は無い
全ての世界に現が蘇る

『還元師』が世界を生かす時
『還元師』は消えていく
時が来るまで深い眠りに着く
全ての世界に夢が巡る

どっちみち死んじやうんだ
『神様』って酷いと思わない？

遊びで僕等を消しちゃうんだもの

プロローグ くものがたりく（後書き）

読みにくい文でごめんなさい（・ー・・；）
しかも前小説を途中で止めてからのスタートで本当に申し訳ないです。

今回からゆつくりとスローペースで始めますので、付き合ってください方は、気長にお待ち下さい（>＜）

くはじまりはここから（前書き）

1日に二話投稿という暴挙をなしてみました。

文章は相変わらずグダグダですが、よろしく願います!!
それと、一つ注意です←

翼「この小説は夢小説ではないので『恋愛』はナシの『友情』小説だ。そこんところ、よろしくな?」

くはじまりはここからく

ソウルソサエティくわがだに

尸魂界 桑ヶ谷家

二階に、大きな部屋がある。

その部屋を埋め尽くすほどの巨大なベットで一人の少女が静かに眠っていた。

巨大なベットに不釣り合いな小さな体は、上下に規則正しく揺れていた。

彼女の名は桑ヶ谷翼。
くわがだにうしほみ

上級貴族、桑ヶ谷家の次女。ご令嬢である。
それでいて、王属特務零番隊隊長でもある。

「翼ー。朝だぞー」

部屋の外から涼やかな男の声が聞こえた。

「翼」と何度も呼ぶが、当の本人には反応が無い。

カラリ

障子が軽快な音を立てて開かれた。

男は中に入り、ベットに乗る。

翼はベット中央で寝ているため、こうでもしないと傍そばに寄れないのだ。

「いい加減起きろ!!」

「おわあ!？」

バツと布団が剥がされ、少し転がる。嫌でも目が覚めた。

「ッにしゃがんだデメエ!!」

「るせえ!とつと起きないお前が悪いんだ!!」

灰色の髪を揺らし、腕を組んでいるのは井坂黒丸^{いさかくろまる}。翼の御付きであつて、零番隊副隊長でもある。

「だいたいなあ!普通に起こせばいいだろ!?なんでいちいち布団剥がすんだよ!!」

「普通に起こして起きたのは昔だけだバカ野郎」

「あんだと!!この馬鹿丸!!」

「ハン!なんとも言ってる。その口の悪さが直ったら普通に起こしてやんぜ」

「デメツ・・・!」

「いい加減降りてきなさい!!!!」

下からビリビリと響くような怒号が聞こえ、渋々ケン力を止めた。

「朝御飯抜くわよ!!!？」

「なに!？」

適当に傍にあった羽織を着て部屋を飛び出した。

飛び出してから残された黒丸は、「ったく、ガキが・・・」と少し笑いながら、階段へと向かった。

食卓へと着いた翼は、朝食をあっという間に平らげ、りんごを食べ
ていた。

「ホント、好きよね。りんご」

その様子を楽しそうに眺める女性は、姫野雪菜。ひめの ゆきな黒丸と同じく翼の
御付きであって、零番隊第三席を勤つとめている。

「んー。まあな」

最後の一切れを名残惜しそうに口へ運び、手を合わせた後立ち上
がる。

「着替えてくらあ」

「そう。じゃあ、先に行ってるわ」

翼の膳を使用人に任せ、雪菜は手に力を集める。
それをスウッと横に引くと、不思議なよどみの空間が開く。

これこそが、零番隊隊員のみが使える特殊な力。
零番隊の隊舎もこの空間の中にある。

雪菜はそこに戸惑いもなく入っていった。

翼は部屋へと戻っていった。

「いよおっし！準備完了！！」

ぱぱつと死覇装しはくしやうに着替え、斬魄刀を腰にさす。

「翼様」

凜とした綺麗な声が聞こえる。

「おう、揚羽^{アゲハ}か」

全てが黒い揚羽蝶が、パタパタと飛んできた。
正体は破面^{ブレイク}と呼ばれる虚^{ホロウ}が進化したものだ。

「黒丸様もあちらへ向かわれました」
「んー。じゃあ、行くかな」

翼は手に霊力を溜める。

「・・・ッ」

翼の体がゆらりと揺らぐ。

「翼様？」

肩に止まろうとしていた揚羽が異変に気づき、心配そうに見やった。

「いや、なんでもねえ。大丈夫だ」

「・・・そうですか」

今度こそ、と、空間を開き入っていった。

く同時、現世く

「ふあ・・・あッ」

欠伸を噛み殺し、席に着いたのはオレンジの髪を持つ黒崎一護。
死神代行でもある。

「どーしたの一護？また寝不足？」

「あー。まあ、そんなとこだ」

一護に話しかけたのは小島水色。
親友だ。

「一護一護いつちつつごおおおおお！！！！！！」

ヒョイ

「ゴフウ！！」

一護に突っ込んできたのは浅野啓吾。
こちらも親友である。

一護は突っ込んできた啓吾を簡単に受け流し、何も無かったかのよう
に啓吾を見た。

「よーす啓吾」

「お、おはようッス……一護」

「おはよう、啓吾」

「よう……水色……」

ゆつたりとゾンビのごとく起き上がってきた。

「んで、俺になんか用事か？」

「ああああ！！そうそう、そうなんだよお！！！！」

「うるさいから、早く言つてよね」

水色に一掃されて、ショックを受けながらも話し始めた。

「それがよお、最近この辺で火事が多いじゃん？」

「それがどうかしたか？」

「俺すごいモン見ちゃったんだよお！！！！」

「 昨晚 P M 〇 9 : 0 0 」

「 ったく、瑞穂^{みずほ}め 毎度毎度俺にパシらせやがって . . .
」

ジュースを買ってこいと言われ、渋々近くの自販機に居た。
チャリン、チャリンと手のひらでお金の数を数えていく。

「 しかも何で十円玉ばっかなんだよ ん? 」

ふと、自販機が明るく照らされている。
それに、急に気温が上がった気がする。

(なんだ . . . ?)

お金から目を離して、後ろを振り返る。

「 な . . . ! ? 」

ゴウゴウと燃え盛る、家。

(何時の間に . . . ! ?)

さっきまでは普通の家だった。なのに、ほんの一瞬でここまで変わるというのと信じられなくなる。

啓吾はハッと思いついたようにポケットに入っている携帯電話に手を伸ばす。

カタカタと震える手で番号を押そうとするが、混乱しすぎて上手く押せない。

と、その時だった。

「・・・・・・・・・・は？」

何が起こった？

何があった？

「消えてる・・・・・・・・・・？」

ごうごうと燃えていたはずの炎は消え去り、燃えていた形跡^{けいせき}すら残していない。

シン・・・・と静まり返った、いつも通りの街だった。

「嘘つけ」

「ハイ、即刻拒否反応——！！！！！」

一護に一刀両断されてしまった。

「なんだよ拒否反応って……。っーか嘘だろ？」

「そーだよ啓吾。嘘はダメだよー？」

「水色にまで裏切られたあああああ！！！！でも本当だつてばあああああ！！！！！」

結局、誰にも信じてもらえなかった。

く尸魂界 零番隊舎く

「あん？還元師^{かんげんし}い？」

翼はゆったりとした大きなイスに座って資料を見ていた。

「ああ、還元師。全てを元通りにするカミサマさ」
「黒丸……。カミサマって……」

雪菜は苦笑いするしかなかった。

「織姫の能力と似たモンか……」
「『事象の拒絶』とはまた違うみたいよ」
「どういうことだ？」

資料から顔をあげ、雪菜を見る。

「『拒絶』じゃなくて、そんなことが『起きなかった世界』と交換するってこと」

「『直す』じゃなくて『交換する』ねえ……。？それで『還元師』……
……だあ？」

「昔は、皆知らなかったからよ」

ギリリ、とイスが鳴く。

「——っかなんで資料に載ってないことを知ってたんだ？」
「今手に入った情報だからだ。書斎から探しまくったんだよ」

新しい資料を放り投げる。机の上にバサリと落ちた。
それも手に取り眺める。

「で、俺たちは還元師を探さなくちゃいけねえのか……………」
「護廷十三隊には極秘だそーだ」
「現世にも誰かやんねえとなあ……………」

これからの大仕事に溜息をついた。

「ならば、現世には私が参りましょう」
わたくし

ひらひらと、揚羽が飛んでくる。

「揚羽・・・か。よし、剣山けんざんと楓かえでにも伝えとけ。お前ら3人に任せ
る」

「承知いたしました」

揚羽は自分の最大限の力とスピードで飛んでいった。

「さて、尸魂界に居ることを願つとくか・・・」

揚羽が飛んでいった方向を見ながら再び溜息をついた。

くはじまりはここからく（後書き）

あー、まとまりねえなあ

翼「いつもだろ」

そうなんだけどなあ（打たれ強くなった

〜うござです〜(前書き)

今回は短いです。

とにかく、短いです。

くうきだす」

ヒラヒラと真つ黒な蝶々が羽ばたく。

「剣山様、楓様」
けんざん かえて

その蝶から発せられた言葉は、2人の男女を呼び止めた。

「ん？揚羽・・・」
あげは

「ホントだ！どうしたの？何かあった？」

男のほうが乃華剣山。のか けんざん 苗字が女性の名前っぽい・・・ということがコンプレックスだ。

だが、片目を隠しているのと、その背の高さもあいまって、『大人の男』という雰囲気があるので、本人が気にする程でもない・・・と思う。

女は風鈴楓。ふうり かえて 亜麻色の髪とキラキラ光る装飾品が彼女の明るさを醸し出している。

楓はすつと指を伸ばした。

「翼様から、『現世へ還元師を探しに行ってくれ』とのことですよ」
かんげんし

その指へ止まりながら、用件を伝える。

「そうか・・・翼さんは何時から・・・と？」

「特には言っておりませんでした、早いほうがいいかと」

「んゝゝゝ。だったら明日にでも行ったほうがいいかな?」

「そうだな。余り遅すぎるとゝゝゝ。いろいろめんどくさそうだ」

剣山がそう言うと、楓は笑って、

「あゝ、そんな事言うんだあゝ」

「ゝゝゝ。なんだよ」

「たいちよーに言っちゃうよゝ」

「そっちの意味じゃねえよ!!」『還元師』が悪用されたら困るっ
「意味だ!!!」

(やっぱり、この2人仲がいいですねゝゝゝ)

揚羽はしみじみとそう思いながら、口を開いた。

「では、翼様には明日あすから、と伝えておきますね」

「ん、お願いね」

「はい」

楓の指から今度はゆっくりと飛び立っていった。

「おら、準備するぞ」

「あいあいさゝ」

2人は明日から必要になる物をそろえるため、その場を離れていった。

―いつも通りの零番隊隊舎。
いつも通りじゃないのは……

何？―

く現世く

少なからず、啓吾^{けいご}の言動が気になっていた―護^{いさご}は、夜の街へと繰り出していた。

ホロウ
虚退治^{ホロウ}のついでに……。だが。

「ギャオオオオオオオ!!!!」

「よつと」

「ギャオオオアアアアアアア！！！」

悲痛な叫び声をあげている虚だが、特に気にはしない。
何故なら、この魂がどこへ行くか知っているからだ。

「よし、終わった終わった——」

もう代行証はウンともスンとも言わない。
虚退治終了だ。

「とりあえず、啓吾ン家から一番近い自販機ちつつたらここだよな
あ……………」

街灯が一本だけ立っていて、夜のせいで恐怖心を煽る道が、さらに
恐ろしく感じる——

……………だろう。一般人には。

「特に変わったトコは見られねーけどなあ……………」

啓吾が言っていたコトはただの冗談だと思いたいが、自分自身、気
になってしょうがない。

試しに後ろを振り返っても、後ろはいつも空き家のようだ。

まず、家が燃える事すらなさそうなものだ。

一護はヒョイッと屋根の上に乗る。

猫が居た。艶やかな黒い毛並みと金色の瞳が美しい猫だ。

「……………って、夜一さん！！？」

そこに居たのは四楓院夜一しほういん よるいちその人だった。
・・・今は『人』ではなく『猫』か。

「よう、一護。久しぶりじゃのー」

「お・・・おお。つーか何やってんだ？こんなところで
「うむ・・・ちと、気になる事があってな」

「気になる事？」

「まあ、ぬしが気にするような事でもない。気にするな
「そうか？なら、いいんだけどよ」

しれつと言いつ放つ夜一から、『これ以上聞くな』とでも言わんばかりのオーラを感じる。

「そう言つぬしこそどうした？虚はもうおらぬぞ」
「あー。整フリスは居ねえよな・・・っただけだ」

嘘だという事はバレている気がした。
分からないけど・・・そんな気がした。

「——ほう、それくらい霊圧を探つて・・・おっと、おぬ
しには無理か」

「う・・・うるせえ！！！」

猫にいいようにされている男は、きっとはたから見たら変であろう。
まあ、どうせ誰にも見えない（夜一は見えるが）ので、良しとする
一護だった。

「翌朝 ソウルソサエティ
尸魂界」

「——つーわけで、頼んだぜ」

「はい、翼様」

「お任せあれ！たいちよー！！」

「・・・楓が暴走しないように見張つときます」

「ひつどー！！私、そんなことしないもん！！」

「さあ、参りましょう」

揚羽に促されて3人（2人と1匹？）は穿界門をくぐった。
うなが

門が閉まり、吹き荒れていた風が止んだ。

「やれやれ．．．あいつらも相変わらずだな．．．」

「まあ、いいじゃない。あの子達らしくて。ね、翼」

返事が返ってこない。

「．．．．．翼？」

翼に目をやれば、本人はボンヤリとした目で穿界門を見ている。

——様子がおかしい

「翼？翼！？」

「おい！翼！！」

黒丸が何度か体を揺すって、ようやく目が覚めたかのようにこちらを向いた。

「．．．？何だよ？」

「『何だよ』じゃねーよ。どうした？珍しくボーっとしてんじゃねえか」

「ん？あ、ああ．．．．．いや、何でもねえ。ちょっと、考え事してただけだ」

「なら、いいんだけど．．．」

雪菜はその歯切れの悪い返事に不審ふしんしか抱かなかった。
抱けなかった。

「帰るぞ。俺たちにもやる事が沢山あるんだ」

黒丸が2人に呼びかけ、瞬歩で行ってしまった。

「あ！待てよ！！」

翼・雪菜もそれに続いて瞬歩で去った。

翼の様子が気になっていた黒丸と雪菜は気づかなかった。

影からこっそり笑う、モノに。

〜うござです〜（後書き）

うん・・・2学期は忙しいなあ・・・
（。ω。、）

くふしぎな少女（前書き）

短い。。。)

翼「そして俺は出番なし」

くふしぎな少女く

く現世　くろねきこしら黒崎一護く

相変わらず眠たそうに学校に登校する一護は、昨日の事を思い出していた。

あの後家に帰る途中、少女の霊・整フラスを見つけた。
まだ5、6歳くらいだろうか。

その場所は事故が多発する場所らしく、花や玩具おもちゃなどのお供えがしてあった。

少女もその被害者だ。

朝早く出て、少女のところへ行った。

「あ！昨日のお兄ちゃん」

少女は一護に気づき、手を振った。
一護は軽く手を上げ、振り返してやる。

「お兄ちゃん、あのね、アヤね、パパとママにね、お別れ言ってきたよ」

「そうか。じゃあ、夜になったら送ってやるよ。それまで、この景色目に焼き付けとけよ」

「うん……。あ、お友達にバイバイ言っていないや」

不安そうに一護を見上げる少女に、一護は微笑ほほえみながら頭を撫でて

やった。

「夜まで・・・な」

「・・・うん・・・！！」

自縛霊では無い少女は、すうっと行ってしまった。

一護は悲しげにそれを見ながら学校へと向かった。

向かおうと、した。

突如、強い風が吹き荒れた。

「おわっ・・・」

思わず目をつむってしまった。
そっと目を開けるが、特に何も無い…………。

「なんだ……今の……」

僅かにだが、霊圧を感じた。
風が過ぎた方向を見る。

そこには、誰かが倒れていた。
道を歩いている人たちが何の反応もしないところから霊だろう。
人が居なくなつた隙に、その霊を抱えて浦原商店へ向かった。

〔浦原商店〕

「はぁ・・・道端に突然っスか・・・？」

「ああ。ついさっきまでは居なかったんだけどな」

「ふむ・・・」

倒れていた霊は少女だった。先ほど、一護と話していた少女よりも年は上のようだ。

そして一番気になったのが――

「因果の鎖が無いっスね。どうやら彼女はアチラの人そうですね」

「やっぱりか。でも、死神でも無さそうなのに・・・」

少女は死んでいるかのように寝ている。

見ているコッチが心配になるくらい、だ。

それにしても彼女は中々不思議だ。

特に目を引くのは額の宝石ひたい・・・だろうか。
不思議な赤い色をしている。

ソウルソサエティ

「一護、尸魂界に確認を取ってきた」

「夜一さん」

昨晚とは打って変わって人型で出てきた。

「確認したところ、該当人物は無しじゃ」

「はぁ！？」

一護は思わず大声を上げた。
後ろのほうでジン太と雨ウルルが不思議そうに覗いていた。

「ナシって・・・そりゃあ・・・」

「つまりは、存在するわけない人物ってわけですかねえ・・・」

横で眠ったままの少女は確かに存在している。

「とりあえず、黒崎さん」

「なんだ？」

「彼女はワタシが見ときます。なので・・・」
「??」

「学校へ行ったほうがいいと思いますよ？」

「ヤベエ！忘れてた！！」

鞆かばんを引っつかみ、「頼んだ！」と言って飛び出していった。
100%遅刻だ。

「やれやれ・・・どうしてアイツはこんな面倒なことばかり引き起こすのかのー」

「なんか憑ついているんでしょうね。疫病神的なものが」
「それはぬしに憑ついているモノじゃ」

夜一はニツと笑って「もう少し調べてくる」と言って出て行った。

「さて、忙しくなりそうだ・・・」

のかけんざん
ふうりんかえで
あげは
く乃華劍山・風鈴楓・揚羽く

「で？どうやって探す氣い？」

「・・・霊圧探って」

「霊圧知らないじゃん」

「黙っとけ」

この3人は現世に来たものの悪戦苦闘していた。
雑魚虚ホロウは基本スルーで『還元師かんげんし』を探す。

「あーもうッ！たいちよーもヒドイ！！」

「まあまあ・・・しかし、翼様は『還元師は額を見たら直ぐに分かる』って言っていましたよ？」

「そこ、なんだよなあ」

剣山は頭を抱える。

「額を見たら分かるって・・・何か俺たちとは違うのか？」

「さあ・・・でも、見た目で判断できると・・・」

「もういいじゃん？適当に徘徊しようよ。偶然に任せてさあ！」

剣山もそれに同意した。

当たって砕ければいい・と思っていた。

（あー、めんどくせえなあ・・・）

仕方なしと諦めて、3人は別々の方向へ散っていった。

偶然が繋がると信じて。

願わくば、尸魂界に居ることを信じて。

くお決まりパターンく（前書き）

翼「タイトル思いつかなかつたろ」

すみません。

くお決まりパターンく

どんよりとした雲を連れて闇が空を支配した。
雨の匂いが段々強くなってくる。
もう少ししたら降ってくるだろう。

「収穫はありません・・・か」

ぱたぱたと羽ばたく蝶々・・・・・・・・揚羽は、なんとなく空座第一
高等学校――
一護の通っている学校の近くに来た。

ただし、今の時間は午後6時と少し遅く、部活生がそろそろ・・・
と帰り支度をしているところだった。

揚羽がここに来た理由は、万が一がありえる、という考えからだっ
た。

「できる限り広範囲で」という事なので、一様に過ぎないのだが。

「あっげっはー！」

軽やかな声と足取りで、揚羽のそばに誰かが来た。

「かえで
楓様！」

「あはっ正解！」

揚羽の横、空中で止まったのは風鈴楓ふうりんかえでだった。
亜麻色の髪が闇を吸い込んで鈍い色になっている。

「どう？なんか手がかりあった？」

「いえ、申し訳ありませんが全く・・・」

「うーん・・・空座町じゃないのかな？」

近くの電柱の上に降り、遠くを見渡す。

「どうするかなあ・・・」

「どうしましようかねえ・・・」

と、言っていた時だった。

突如、「ギヤアアアアアアア！」と誰かの悲鳴が聞こえた。

「むむっ！？事件！！？」

「行ってみましょう！」

「あーいよっ」

瞬歩を使い、悲鳴が聞こえたほうへ行く。

揚羽もそれについていくが、楓の速さになかなかついていけない。

（早すぎです！）

心の中でばやきながら急いで追いかけて行った。

「一護おおおおお！……ヘルプッ！ヘルプミー……！」

奇妙なライオンのぬいぐるみ……コンが虚^{ホロウ}から走って逃げている。

「アングヤアアア……！」

「なんだよこのゴジラみたいなヤツ……でかい図体して結構早いし……！」

「ウングヤアアア……！」

「鳴き声になんかパターンがあるし……！」

ゴジラのような虚はズンズンズン地響きを立てながら追いかけてくる。

だが、そこで負けるコンではない。

「コン様スーパーダッシュ……！」

足を必死に動かして、虚から逃げるが、

「あべしっ！」

こけた。

盛大にこけた。

しかも転がった先は空き地で行き止まりだ。

「シューシュー」

虚は嬉しそうに唸り始めた。

「いついつ・・・イヤアアアアアア！！！」

喰われることを覚悟した。

「あゝらよっ！」

「ギヤアアアアアア！！！」

耳を塞ぎたくなるような声をあげて虚は消え去った。

「・・・え？・・・ええ？」

「おゝわりつと・・・ふう」

「え・・・えええ？」

コンが喰われる直前、そのやつと到着した楓が虚を切り裂いた。手に握られた小太刀は鞘へ滑り込ませた。

「だいじょーぶ？」

コンがその顔を確認した時だった。

「お強くて麗しくてチャージングなお嬢さん！！俺と一緒に遊びませんかー！！！」

「えーやだ。それに私、自分より身長低いヤツ全員却下だから」「敗北！！！」

そう叫んでなぜか空中から後ろにぶっ飛んだ。

(てか・・・ぬいぐるみが立ってる・・・喋ってる・・・)

「くっ・・・無念・・・せめて一護の体なら・・・100%身長が上なのに・・・」

(どうなってるんだろ・・・?)

「そうすればウツフンアッハンな・・・オフッ！！！」

楓は手にグローブを装着し、コンの頭を叩いた。

コンの口から何かが出てくる。

「あゝナルホド。ぎこんがん義魂丸か。つかコレぬいぐるみでも動かせんのか？」

「楓様あゝ！！！」

やっと追いついた揚羽が小さな体で楓にタックルをかました。

「うわっと・・・。揚羽？」

「置いて行かないでくださいまし！！！」

「あはゝ・・・ごめんね？」

肩に止まらせて指先でちょいちょいと撫でてやる。
揚羽はそれを気持ちよさそうに受け入れた。

「ところで、それは・・・」

「あ、コレ？なんかこのぬいぐるみに入ってた義魂丸・・・」

「コーン！どこだー!!」

「・・・むむ？」

上の方から誰かの声が聞こえた。

「んんん？あれって・・・」

「あれは・・・一護！」

「え？あ・・・揚羽!？」

一護は急いで下まで降りて、二人のそばに来た。

「お久しぶりですね・・・一護」

「ああ、そうだな。で、この人は・・・」

「初めまして！私は零番隊第五席、風鈴楓です！よろしくね」

「よろしくな。つか、零番隊ってことは翼の・・・」

「そ！たいちよーの部下ってワケ!!」

一護はその無駄に高いテンションに若干ひいていた。

「おお、そうか・・・あ、俺は死神代行の黒崎一護だ」

「隊長の言ってた人ってあなたなんだ。へえ・・・」

楓は一護の周りをウロウロする。

ピョンピョンと全身をじつくりと見ていった。

「——ふふ、隊長が惚れるのも分かるなあ・・・」

「はあ！？惚れ・・・！？」

「・・・見た目的な人柄とか、乗りやすさとか、そうゆうトコですよ」

「わ・・・分かつとるわあ！！！つか乗りやすさ！！！」

一護は一瞬カン違いをしたが、すぐに揚羽にその意味を言われ、照れ隠しに叫んだ。

顔は茹蛸ゆでたこのように真っ赤になっている。

楓は面白がつて、さらに追い討ちをかけた。

「あゝもしかして、たいちよーがあなたのこと 好き とでも思ったの？わー、早とちり」

「るせえ！！！違うっつつてんだろーが！！」

拳を振り上げたので、流石にちよつと慌てた。

「わーわーわー！！待った待った！！冗談！冗談だつてばあ！！！！」

それを聞いた一護はなんか腑に落ちない顔をしながらも、拳を下ろした。

「で、わざわざ零番隊の隊員が何で現世にいるんだ？」

「ん？暇つぶし」

「はあ？」

あまりに期待はずれの答えに眉をしかめた。

「たいちよーだつてよく来るでしょ？……あ、最近はあるか」

「まあ、確かにそうだな……」

「で、『私も行きたーい！』って言ったらアッサリOKもらえたからね。揚羽と一緒に来てみたってわけ」

「フリーダムだな。零番隊」

「やることやれば結構いろいろ自由だよー！」

やること……とは、まあ所謂書類いわゆるなどだ。

席官クラスともなれば、量が増えるので、やはり大変なのは大変だが、まあ、それなりに楽しんでやっている。

「さて、楓様。お話しもそこそこにして……そろそろ参りませんか？」

「そうだね。じゃあ、バイバイ」

「じゃあなー」

楓が去っていく中であることに気がついた。

「ああ！コン置いていけえ！！！」

のかけんざん
く 乃華剣山 く

「ふああ・・・見つかんねえなあ・・・」

大きな欠伸^{あくび}をひとつこぼす。

こちらも楓同様、上の方から探している。

屋根から屋根へ飛んでは探し、探しては飛んでいた。

（雨、降りそうだな）

空模様が気になりだした。日の光が届きにくく、薄明るい。
元々鈍い髪色が、もっと鈍い色になった気がする。

「ん？この霊圧・・・・・・・・」

気になる霊圧を見つけ、そちらへ視線をやる。

視線の先には井上織姫と茶渡泰虎。そして石田雨竜が居た。

（結構高い霊圧してんなあ・・・接触は避けとくか）

霊圧を消し、3人の視界から外れた。

「・・・今、消えたな・・・・・・・・霊圧」
「そうだね」

「だけど、今の霊圧は死神のものだ。そこまで警戒する必要はないだろう」

雨竜は冷静に判断する。

（バレてるし……。つかこいつらってもしかして・・・・・・・・？）

伝でんれいしんき霊神機を取り出して、少しいじる。

「お、やっぱり。翼さんの言ってた奴等か・・・」

剣山はさらりと立ち上がって、視界に入るのもいとわずにキョロキョロとあたりを見渡した。

『還元師』探しを再開した。

「急に出てきた・・・」

「急に出てきたね・・・」

「急に出てきたな・・・」

3人はそちらをジーと見やった。

（見慣れない死神だな……。だが、この霊圧・・・・・・・・）

特に雨竜は剣山のことを怪しげに見ていた。

「——あの・・・・・・・・」

そんな中、織姫は勇気を持って話しかけた。
雨竜とチャドは声もなく驚いている。

「・・・なんだ？」

まあ剣山も特に気にはしていないので、素で返した。

「え・・・つと、護廷十三隊の方ですか？」
「いや？」

（なんかあつちもさり気なく返してきた・・・！！）

「ム・・・じゃあ、オマエは何者だ？」

（ああああああ！茶渡君まで・・・！！）

「・・・話す必要もねえだろ？別に、お前等に用事があるわけじゃねえし」

「じゃあ何で急に姿現したんだお前は！！」

流石の雨竜もこれにはツツコんでしまった。

「——別に？敵じゃねえからだ」
「敵・・・じゃない・・・？」

織姫は少し眉を寄せた。

「まっ、どのみちお前等には関係ないことだ」
「ま・・・待てー！！」

剣山は雨竜が呼び止めるのも聞かず、さっさと行ってしまった。

「アイツ・・・!!」

「で、でも！敵じゃ無いって言ってたし・・・！」

「そうだな・・・あんまり、気にしなくても・・・いいと思う」

「——いや、さっきあいつは『護廷十三隊の者では無い』ということ肯定した。まあ、そこから考えると『零番隊』の者が『野良死神』ってところだろうね」

「野良死神・・・」

織姫の脳内では、先ほどの死神（剣山）の頭にワンコの耳とっぽがついているのを想像した。

「『死神代行』と、いう考えは・・・」

「だったら代行証でも見せたほうが怪しまれないさ」

雨竜は少しずれたメガネを押上げた。

「僕はアイツを追ってみるよ」

「うん————気をつけてね」

「分かってるよ」

トソツと飛び上がって、飛廉脚ひれんきゃくを使い剣山を追いかけて行った。

くお決まりパターンく（後書き）

眠い

くあらしはまだこないく（前書き）

いつになったら出したいキャラクターが出てくるんでしょうか。

ついでに、翼もいつになったら出てくるんでしょうか。

「あらしはまだこない」

「現世 石田雨竜」

乃華剣山を追っていた雨竜だったが、途中で見失ってしまった。

「クソッ・・・どこに行った？」

結構な距離を飛廉脚ひれんぎやくを使っていたので、だいぶ息が上がっている。
頬を伝う汗を、鬱陶うつとうしそうに拭った。

「——もう、こんな時間か・・・」

腕時計で時間を確認し、空を見上げた。
夕方から曇っていたせいだろう。星の瞬きひとつ見えなかった。

（仕方がない、ここまでにするか・・・）

最後に1度だけ周りを見渡し、そしてその場を立ち去った。

「・・・しつこかったな・・・」

雨竜の姿が完全に見えなくなってから、剣山は姿を現した。

「ったく・・・これじゃあ落ち着いて還元師をさがせねーじゃねーか・・・」

腰に手をやって、一つ溜息をついた。

ポツッ

首の後ろに冷たい何かが落ちてくる。

ふと顔をあげると、それは自分の顔にも落ちてきた。

「雨、か・・・」

最初は少しだけだったのに、すぐに本降りになった。死覇装が雨に濡れてへばりついてきた。

剣山は、懷から伝霊神機を取り出して、耳に当てた。

『もっしー?』

「よう。・・・見つかってない、よな」

『まあね・・・見つかったら連絡してるよ・・・』

電話の相手は楓だ。

いつもの元気があまり無いように思う。

『で? なにかあった?』

「・・・なにも。あえて言えば元旅禍^{じよか}たちに会った」

『あれ、剣山も?』

「・・・」
『も?』

『うん! 私もね、黒崎一護に会ったよ!』

黒崎一護

尸魂界が彼の实力を認めているといっても過言ではない。と、剣山は思った。

「って、オマエ、黒崎一護に話してねえよな？」

『あつたりまえじゃん。楓だって、零番隊だよ？』

「そうだったな忘れてた」

『うっわ！超棒読み……』

きつと、伝霊神機の向こうでは口を尖らせているのだろう。楓はとても分かりやすい。

『——あの、さ、剣山』

「……なんだ」

『隊長、大丈夫……か……な』

「何がだ？」

楓の口調が真面目になる時は、悪いことが起きる。昔からそんな感じだ。

『ん……口では、言いくいんだけどね？なんか、おかしかったような……』

（ほら、やっぱりいいことじゃねえな……）

『副隊長や雪菜の姉様あねさまには言いくくって……』

「……それで？」

小さく息を吸う音が聞こえた。

『あ——……』

「楓？」

急に声が入らなくなった。伝霊神機からはノイズ音が走る。

「楓、楓！」

その時だった。

急に背後から大きな影が襲ってきた。

剣山は、瞬歩を使ってかわした。

攻撃してきたのは虚^{ホロウ}だった。

足が短く、腕がとても長い。歪な形をしたホロウだ。

「チツ、こんな時にホロウかよ・・・ついてねえ」

次々襲い掛かって来る攻撃をヒョイヒョイとかわしながら、刀を引き抜いた。

「才まエ、うまソウな二オイする」

「喋った！？」

体に不釣り合いな腕を、ムチのようにしならせて攻撃をしてくる。

「おまエ、ウマそうナにおいスる」

このホロウ、ただのホロウではないらしい。

（なんだ？^{アランカル}破面のなりそこない・・・もしくは、知能の高いホロウか？）

だが、後者はどうも違うようだ。
よくみれば、仮面が少しだが割れている。

ヤツは特に攻撃パターンを変えるでもなく、延々と腕を叩きつけているだけだ。

「クいたい・・・喰イタイ!!」

今度は腕を横に振ってきた。

ただ、単純な攻撃なので、特に心配する事はない。

「ほーう、そんなに喰いたいか？」

ニヤリと笑みを浮かべた。

「だったら喰わせてやるよ」

その言葉を聞いて、ホロウは嬉しそうに、真っ直ぐ剣山だけ目指して突進してきた。

だが、喰う寸前で剣山の姿は消えた。

「・・・?・・・?」

キョロキョロとしてみると、頭に痛みを感じた。
ツウ、と血が仮面を伝って落ちてくる。

「ただし、俺の攻撃・・・だけだな」

「ギ・・・ギアアアアアアアアア!!」

急に痛みに襲われたホロウは、徐々に姿が消えていった。

『・・・ん・・・剣山!!』

「ん？楓か？」

『よかったあゝ！やっと復活した!』

ほっとしたような声が聞こえた。

「悪い。ホロウだ」

『そう。でも、急に連絡ができなくなったから心配したよ』

「安心しろ。ザコだった」

警戒を解き、刀を鞘に納めた。

「ところで、さっきの・・・」

『ああ、うん。・・・やっぱり後で話すよ』

「・・・そうか。で、今どこにいんだ？」

取りあえず、今日のところは楓・揚羽と合流しようと考えた。

『今？浦原商店の近く。たいちよーがね、しばらくは浦原商店で寝泊りしろ・だつてさ』

「・・・おい、それ、いつ言つてた」

『昨日の夜』

「早く言え!!」

『ごつめーん！忘れてた！テヘツ』

「よーし楓エ・・・そつから動くなよ？今からぶつ飛ばしに行つてやる」

『・・・却下』

「断る」

『わ、分かった分かった！！もう「テヘッ」とか言わないから！！』
「ったりめーだ！！じゃあな」

感情任せに通信を切った。

まあ、ブチってやった。

剣山の姿は一瞬にして消えていった。

「はあゝゝ剣山、恐かったよゝゝゝ」
「楓様が余計なことをするから・・・」
「だつてえゝ」

電話を切られた後、雨宿りができるくらいの木がある空き地に2人はいた。

「待ってる」と言われた以上、動いたらまた怒られそうだ。

「だからって、ブチることないのに……」

「ふふ……さて、なにして待ちましょうか」

手持ち無沙汰でやることがない。

「剣山が早く来ればいいのよ……」

「もう、楓様……」

この後から、会話が無くなり、静かな時間が流れた。

雨の音が耳に心地よい。

湿った土の匂いも心が落ち着く。

「楓……」

「あ！来た……」

上から雨と共に下りてきた。

「この野郎が……」

頭を強く叩かれて、クラクラする。

「なっ！にすんのよ……！！」

「うっせ……」

「女の子叩くとかヒド……！！」

「オマエ以外なら優しくしてやんぜ」

「うっわ、最悪!!」

口げんかをしている2人をいつ止めようか、と揚羽は眺めていた。

そんなことをしている間にも、どんどん暗くなってきた。

もともと曇っている事もあり、いつもより暗く感じた。

時々、雷が光っていた。

「だいたいねえ!!」

「楓様、剣山様、そろそろ浦原商店に向かいませんか？」

ちよつと寒くなってきたのもあつて、流石に止めた。

「ああ・・・そうだな・・・」

「むゝゝ。じゃあ、行こっか」

楓は揚羽を掴んで、剣山と共に瞬歩で駆けていった。

くあらしはまだこないく（後書き）

早く出したいなあくくくくく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6533v/>

B L E A C H change of the worlds

2011年11月29日14時45分発行